

自己救済としての詩作

—デーメルの初期芸術論—

新 田 誠 吾

Er ist geboren am 18. November 1863, hat ein Weib und zwei Kinder, keine Kirche und kein Vaterland, glaubt an die Menschheit, und wird hoffentlich so bald nicht sterben...¹⁾

生まれたのは1863年11月18日で、妻と2人の子どもがおり、教会も祖国も持たず、人類を信じ、すぐには死にたくない……男です。

I. はじめに

詩人リヒャルト・デーメル（1863～1920）は、19世紀末から20世紀初頭にベルリン、ハンブルクで活躍した。デーメルは、1891年9月に最初の詩集『救済（Erlösungen）』をシュツットガルトのG.J.ゲッシェン書店から出版した。初版は700部。159篇の詩は、3つの段階（Stufe）に分けられ、それぞれに「悪戦苦闘（Ringens und Trachten）」、「恋（Liebe）」、「生きること・働くこと（Leben und Arbeit）」という表題が付けられている。

1890年代、デーメルは『救済』に続けて3つの詩集、『しかし愛は（Aber die Liebe²⁾』（1893年）、『人生草紙（Lebensblätter）』（1895年）、『女と世界（Weib und Welt）』（1896年）を出版し、1900年前後にはドイツ語圏を代表する詩人の一人になった。

1) Richard Dehmel : Ausgewählte Briefe aus den Jahren 1883 bis 1902, Berlin 1922, S. 75.

2) Nun aber bleibt Glaube, Hoffnung, Liebe, diese drei; aber die Liebe ist die größte unter

デーメルが詩人として活躍を始めた時期は、ベルリンに自然主義の作家たちが集まった時期と重なる。本稿では1890年代のデーメルの詩作に焦点を当て、彼の芸術論がどのようなものだったかを明らかにする。そこで、まずベルリンの自然主義、「モデルネ」と呼ばれるモダニズム運動について説明し、デーメルの詩作、宗教観について考察する。

II. ベルリンのモダニズム

デーメルの90年代の創作活動を「初期」とすれば、初期デーメルの芸術観は、19世紀末ベルリンの文化状況ときわめて密接に結びついている。

1890年代初頭、デーメルは「フリードリヒスハーゲン作家サークル (Friedrichshagener Dichterkreis)」に参加し、自然主義の作家たちと親しく交わるようになった。このサークルは、フリードリヒスハーゲン（現在のトレプトウ・ケーペニック地区）のミュゲル湖畔に住んでいたヴィルヘルム・ベルシエ (Wilhelm Bölsche) とブルーノ・ヴィレ (Bruno Wille) の家に作家たちが集うことで始まった。同地域にハウプトマンが居を構えると、彼は精神的支柱となり、ブライプトロイ、ハルト兄弟など自然主義の作家が多く参加するようになった。その名声は北欧にも達し、ストリンドベリのようにベルリンに引越す作家も現れて、90年代には芸術家村の様相を呈した³⁾。

ドイツ北部のヴォルプスヴェーデなど、芸術家村が誕生した背景には、社会の急激な変化がある。自然科学の発展による科学的思考、とくにダーウィンの進化論は、価値観の転換に決定的な影響を及ぼした。産業革命以

ihnen. (1. Korinther, 13:13). こういうわけで、信仰と希望と愛は残ります。しかし、愛はもっともすぐれたものです。『コリント人への手紙第一』13章13節。表題はこの一節によると考えられている。

3) Gertrude Cepl-Kaufmann und Rolf Kauffeldt: Friedrichshagener Dichterkreis. In: Wulf Wülfing, Karin Bruns und Rolf Parr (Hg.): Handbuch literarisch-kultureller Vereine, Gruppen und Bünde 1825-1933. Stuttgart und Weimar 1998, S. 112-126.を参照。

降の重工業の発達と都市への人口の流入、労働者階級への社会主義思想の浸透等、社会の急激な変化は、人々を懐疑的にさせた。19世紀末から20世紀初頭にかけて「生活改善運動」(Lebensreform)がドイツを中心に盛んになったのも偶然ではない。これは、工業化、物質主義、都市化といった急激な変化に反発した自然回帰運動と考えることができる。

ベルリンの作家たちは、自然主義をこれまでになかった新しい文学運動として捉えていた。つまり、変化する社会に対して「現代的な(modern)」文学作品を生み出す必要性を感じていた。フランスのゾラによってもたらされた自然主義を模倣するのではなく、ドイツが文化の発信源になろうとした。この意識が「モデルネ(die Moderne)」と呼ばれるモダニズム運動の原動力である。

作家ヘルマン・コンラディ(Hermann Conradi)は、1885年に出版された詩のアンソロジー『現代詩人氣質』の巻頭言「我らが信条(Unser Credo)」に、こう書いた。「我々には同人文学、マルクス主義文学はあるかもしれないが、ゲルマンから生まれた文学はない。昼の子⁴⁾、夜の子であれ、切望するすべての人にとって居場所や糧となる力強く存在感のある文学はない⁵⁾」と文学の現状を嘆き、「新たな『偉大な精神と深遠な感情』の時代を再興するのだ⁶⁾」とナショナリズムに訴えかけるような調子で締めくくっている。

「モデルネ」という用語を広く社会に知らしめたのが、ドイツ文学者のオイゲン・ヴォルフ(Eugen Wolff)である。ヴォルフは、1886年の作家団体「突破!(Durch!)」設立にも関わった。「突破!」には、ホルツ、ハルト兄弟、ブライプトロイ、ハウプトマン、ベルシェ、ヴィレといった自然主

4) 「あなたたちは光の子であり、昼の子である。私たちは夜の者でも闇の者でもない」『テサロニケ人への第一の手紙』5章5節

5) Hermann Conradi: Moderne. Dichter-Charaktere. Hrsg. von Wilhelm Arent. Mit Einleitungen von Hermann Conradi und Karl Henckell. Berlin, 1885, S. II. (傍点は原文の強調部分)

6) Conradi (1885), S. IV. (傍点は原文の強調部分)

義の作家たちが加わった。1886年9月10日、ヴォルフは「突破！」で、「モデルネー文学の『革命』と『改革』について」という題で講演を行った。ヴォルフは、まず現在のドイツにあるのは、「インテリ気取りのディレッタント⁷⁾」文学か「洗練されたように見えて崇高さには程遠い」ものか、「擬古典主義の亜流」しかないと言う。また、演劇においても外国、特にフランスのものを巧妙に模倣していると批判する。そのうえで、文学の新しい潮流を起こすために、取り組むべき課題を3つ挙げた。

この精神的な戦いの前面にあるのは、3つの問いである。1) 社会の問い 私もあなたと同じ被造物なのに、あなたと同じような生活をしてはならないのか？ 2) ナショナリティの問い 一国—しかもどの国？—が主導権を握るのか、それとも同等の権利が保障された国家連合を永続的に保てるのか？ 3) 宗教の問い 古い宗教観で強固に作り上げられた道徳感情では癒やされなくなった者すべてが、だらだらと続く嘘のなかで古臭い教会の一員としてとどまるべきか、それとも自らの新たな福音を世の中に説くべきか？⁸⁾

興味深いのは、文学の対象が個人の生活ではなく、社会正義、国際政治、宗教といった個人を取り巻くものに及んでいる点である⁹⁾。これらは19世紀末の都市ベルリンが抱えていた問題でもあった。ヴォルフは続けてこう述べる。「こうした現代的な(modern)発想、きわめて現代的な戦いこそが、現代文学の魂である。偉大な過去の後塵を拝する亜流はもういらぬ。必要なのは、偉大な未来の先陣を切る者だ。未来を志向し、確信に満ちた調べこそ、モデルネの詩である¹⁰⁾」。

7) Eugen Wolff: Die Moderne. Zur "Revolution" und "Reform" der Litteratur. In: Deutsche academische Zeitschrift (Organ der "Deutschen academischen Vereinigung"). Jg. 3, Nr. 33, 26. September 1886, Erstes Beiblatt, S. 5.

8) Wolff (1886), S. 6.

9) 日本の「自然主義文学」が社会の問題を描きながら、次第に個人の経験と内面を描く「私小説」に変化していったのとは対照的である。

この熱のこもった講演から一週間後の同じ金曜日の晩に、討論会が催された。議論を受けて「自由文学連合・突破！の綱領（Thesen der "Freien litterarischen Vereinigung Durch!"）」が1886年12月に雑誌に発表された¹¹⁾。匿名ではあるが、作成にヴォルフが中心的役割を果たしたと考えられる。ここでは10の綱領の内容を簡潔に紹介してみたい。

1. 今ドイツ文学は大きな曲がり角にある。
2. この時代の生き様をどう表現するかが、現代の作家の課題である。
3. 我々の文学は、活動、内容ともに現代的でなければならない。
4. 世界文学の各文学との関係を慎重に保ちながら、ドイツ文学はドイツの民族精神に見合った性格を持たなければならない。
5. モデルネの文学は、情熱を持った生身の人間を冷徹な真実のなかに描かねばならない。
6. 我々の芸術の究極の理想は、もはや古代ではなく、現代である。
7. こうした基本原則がある以上、未だに残る亜流擬古典主義、大げさな技巧派、インテリ気取りのディレッタントには戦いを挑む。
8. 同様にモデルネの文学に求められるのは、現状を決意と良識をもって改革する努力を怠らないことで、現代芸術にふさわしい原理のために文学に革命を起こす強い気持ちを持ち続けることである。
9. 新たな文学の隆盛を準備するため、芸術批評を刊行し、重要不可欠な戦いの手段にする。
10. 現在のように、強固な共同戦線が張られて、それが斬新な精神に満ちた詩の出現を阻むような時代に必要なのは、同人であれ、作家集団であれ、同じ志を持つ者が一緒になって戦いを進めることである。

10) Wolff (1886), S. 6.

11) Das Magazin für die Litteratur des In- und Auslandes. Wochenschrift der Weltlitteratur. Jg. 55, 1886, Nr. 51, 18. Dezember, S. 810.

この綱領を見てもわかるように、ベルリンのモデルネ運動は、古代から続く西欧文化の伝統からいったん訣別し、現代および未来を強く志向したものである。その一方で、外国文学の安易な模倣を排し、ドイツの民族精神に根ざした文学を目指していた。綱領のなかに、ナショナリズムを内包した新たな国民文学運動であったと捉えることができよう。

III. デーメルの芸術観

本章では、初期デーメルの芸術観について考察する。その芸術観は、科学的知見に基づいて客観的に描写する自然主義から出発し、ベルリンのモデルネに大きく依拠している。しかし、デーメルは伝統的な宗教を完全に否定したわけではない。むしろ、「救済」や「永遠の命」といったキリスト教の本質を自ら思索して、自分の芸術観に取り込んだ。

1. 初期デーメルの詩作

初期のデーメルは、詩は体験から生まれると考えていた。詩は心の変化を表したものであり、読者は感情の変化を忠実にたどることが大切と考えていた。

1895年に出版した詩集『人生草紙』では、わざわざ「親愛なる読者！(Verehrter Leser!)」と題する46行に及ぶ詩を取めている¹²⁾。この詩のなかに、デーメルの詩作に対する基本的態度が示されている。デーメルはこの「親愛なる読者！」をよほど気に入っていたようで、1906年の全集出版に際しては、『救済』の冒頭に再録したほどである¹³⁾。

親愛なる読者のみなさん、何と、お願いがある

12) Richard Dehmel: Lebensblätter. Gedichte und Anderes. Berlin 1895, S. 30-31.

13) Erlösungen. Gedichte und Sprüche. In: Gesammelte Werke. Bd. 1, Berlin 1906, S. 1-2.

きちんと読んで、どうか、気に留めてくれ

詩を読むのは

至極簡単なこと

[中略]

一番は、私の意図を探さないで

[中略]

考えを伝えるなら

論文か、類するものを書く

詩は論文ではない

私の詩は心の移り変わり

[中略]

要するに、私は詩を体験し

体験は思索からは生まれない

[後略] (カッコ内は筆者。以下同じ)

さらにデーメルは、「芸術のための芸術」といった標語に代表される芸術至上主義を嫌っていた。のちにデーメルと再婚することになるイーダ・アウエルバッハは、ゲオルゲの熱心な読者であり、1895年にゲオルゲとデーメルに手紙を送り、双方から返信を受け取った。ゲオルゲは、パリでマラルメや象徴主義の芸術家との交流ののち、独自の芸術理論を作り上げ、芸術至上主義を標榜していた。ゲオルゲは、イーダにつきのように返信した。

作品内で私が作り上げたもの、それは血で書かれていますが、それをご覧になりたいとお気の毒さま！ そうしたものは決して見てはならないのです。芸術——私の芸術ならなおさら——体験や湧き上がる感情を直接再現はできません。リズムに変換されるのを待って出来上がるのです。これを通して心の奥底から湧き上がる感情が「血の通った」ものと感じられるということ、数少ない私の読者の関心事であってほしいものです¹⁴⁾。(傍点は筆者)

ゲオルゲが述べているのは、作品を生み出す際に芸術が持つ変換、デフォルメについてである。詩の言葉になった途端、言葉は体験や感情そのものではない。これは、時代が下って1930年代にロシア・フォルマリズムが理論化する「異化効果」と同じものである。すなわち、「生の感覚を回復し、事物を意識せんがために、石を石らしくするために、芸術と名づけられるものが存在するのだ。知ることとしてではなしに見ることとして事物に感覚を与えることが芸術の目的であり、日常的に見慣れた事物を奇異なものとして表現する《非日常化》の方法が芸術の方法¹⁵⁾」である。

さて、デーメル返信は、ゲオルゲ派と自身の芸術観の違いを際立たせている。イーダは、ユーゲントシュティールの雑誌『牧神 (PAN)』に寄稿したデーメルの記事に対して¹⁶⁾、「シュテファン・ゲオルゲが主宰する『芸術草紙』の作家を一人も取り上げないのはなぜですか？¹⁷⁾」と手紙のなかで素朴な疑問をぶつけた。イーダは『芸術草紙』を愛読しており、雑誌の最新号を手紙に同封していた。デーメルはつぎのような返信を送った。

『牧神』が目指すのは、あの人たちが目指すものとはまったく異なります。ゲオルゲは「芸術」は自分のものだと思っています。私たちはそうは思いません。[中略] 彼らが目指すのは芸術のための芸術で、私たちが生のための芸術です。生きるとは多種多様で、選ばれし者のみに許された神殿ではないのです¹⁸⁾。

イーダから手紙を受け取る直前に、デーメルは『人生草紙』という詩集

14) Stefan George- Ida Coblentz. Briefwechsel. Hrsg. von Georg Peter Landmann und Elisabeth Höpker- Herberg. Stuttgart 1983, S. 52-53.

15) ヴィクトル・シクロフスキー (水野忠夫訳) : 『散文の理論』, せりか書房 1971, p15.

16) Richard Dehmel: Aus Berlin. In: Pan. Jg. 1, 1895/96, Heft 2, Juni 1895, S. 110-117.

17) Richard Dehmel. Dichtungen, Briefe, Dokumente. Hrsg. von Paul Johannes Schindler, Hamburg 1963, S. 182.

18) Richard Dehmel : Ausgewählte Briefe aus den Jahren 1902 bis 1920, Berlin 1923, S. 207.

を出版しているが、このタイトルにもゲオルグとは対照的に、生に向けた芸術という考えが色濃く反映されている。

2. 「自己救済」というテーマ

最初の詩集を發表する前後の手紙には、たびたび「救済」という言葉が現れる。デーメルは、けっして熱心なキリスト教徒ではなかったが、救済や永遠の命といったテーマについて思索をしていたことがわかる。

ヴォルフが「突破！」で行った講演でも、あからさまな教会批判が展開されたように、19世紀半ば以降、キリスト教を拒絶したり、キリスト教では自明とされてきたことを科学によって排除する傾向が強まった。歴史学者のニッパードによれば、「現世こそが、現代生活や人間信仰の基本要素になり、人間自身が世界を作り出し、その世界のなかに永遠や意味がある¹⁹⁾」と考えられるようになっていった。

これに伴い、「救済」の概念も遅くとも19世紀には、必ずしもキリスト教と結びついたものではなくなった²⁰⁾。さらに、ショーペンハウアーはこの概念を逆転させてしまう。救済とは、死後の話ではなく、もともと生に内包された倫理だとした。主著『意志と表象としての世界』のなかで「生への意志の否定²¹⁾」、すなわち生への執着を捨てることが、人生の苦しみからの救済につながると説いた。

デーメルの救済概念も、現世に結びついたものであったが、ショーペンハウアーのように生への執着を捨てたわけではなかった。むしろ、詩人として生への執着を人一倍持っていたからこそ、現世での救済を実現しようとしていた。

19) Thomas Nipperdey: Deutsche Geschichte 1866-1918. Band I: Arbeitswelt und Bürgergeist, München 1990, S. 449.

20) E. Schott, „Erlösung“, In: J. Ritter (Hg.): Historisches Wörterbuch der Philosophie, Bd. 2, Darmstadt 1972, Sp. 717f.

21) Arthur Schopenhauer: Die Welt als Wille und Vorstellung I, Kap. 68, Werke I, S. 505. In: Werke in fünf Bänden. Zürich 1988.

最初の詩集『救済』のタイトルも、結婚という個人的な出来事が契機である。1889年、25歳のデーメルは1歳年上のユダヤ系ドイツ人のパウラ・オープンハイマーと結婚した。パウラの父は、ベルリンのユダヤ教改革派の聖職者・ラビを務めていた。デーメルの伝記を著したユリウス・バーブはこう述べている。「デーメル自身が何度も言っているように、パウラとの恋は、彼の青春を救済してくれる運命的なものだった。恋愛を通して彼は一人前の人間、作家になったのである²²⁾」。

1887年にジーマン・ヘルマンに宛てた2通の手紙には、デーメルのキリスト教に対する考えが如実に表れている。デーメルは、聖書の内容を否定的には捉えず、むしろ現実のなかで実践することの尊さを指摘する。

誰でも、聖書を自分のささやかな行動の基本にすることができます。これを実践し、どんな人の前でもこの基本に立つ人は、自分の人生を高めていけるでしょう。そういう人は、イエスが言うように、永遠の命が与えられるわけです²³⁾。

しかし、キリスト教の本質をなす「救済」が、すでに人々には理解しがたいものになっていることを指摘する。

ところが、[イエスの]自己放棄が意味不明でわからず、自分の感覚世界で生きている大ぜいの人には、実際理解できません。だから、そういう人は、永遠があるはずのところ、そこに通じる道から外れてしまっています²⁴⁾。

もう一度イエスの言葉を思い出してください。「父よ、お赦してください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです²⁵⁾」 [イエスを十字架につけ

22) Julius Bab: Richard Dehmel. Leipzig 1926, S. 47. (傍点は筆者)

23) Dehmel (1922), S. 20.

24) Dehmel (1922), S. 29. (カッコ内は筆者)

た民衆の] 独善さは教育を受けていない者の特徴です。心の教育がなされていないという意味で。[中略] 大半の人は、未だにそうした修養が足りないので、「キリスト教徒」の圧倒的多数があゝの民衆と同じく独善的なのです²⁵⁾。

デーメルは、神による死後の「救済」ではなく、現世における自らの努力による救済、すなわち「自己救済」に価値を見出そうとした。しかも、デーメルは狭隘なナショナリズムに陥ることなく、「人類のため」の人間であろうとしたことが読み取れる。

しかし、人類の命、永遠の命を持つために個人が何をすればよいかをわかっている者は、できる限り、思考や感情に留まることなく、個々の行動を通して人類のための人間である義務がある²⁷⁾。

もっとも私は誰に対しても、ましてや下層の人たちに気休めを言う性分ではありません。それは、私の考える幸福とは相容れません。幸福は、一人ひとりが内面や外的状況に応じて自ら心の救済を行うことでしか得られません。しかし、自分や生活を投げ打ち、人のために何かすることで、その当人が自分を救済しよう、みんなのために尽くそうという気持ちになる。これこそ、私の人生の願望であり、私自身の救済だと心底思っていることです。これまでもこれからもそう思うでしょう²⁸⁾。

IV. おわりに

本稿の冒頭にあるエピソードは、1891年にデーメルが編集者カール・ヘ

25) 『ルカによる福音書』23章34節。

26) Dehmel (1922), S. 30. (カッコ内は筆者)

27) Dehmel (1922), S. 31.

28) Dehmel (1922), S. 59.

ンケルに送った手紙からの抜粋である。ヘンケルが編集する詩のアンソロジーに載せるデーメルを紹介を、冗談交じりに書いたものだが、この一節にデーメルの性質がよく表れている。

90年代のデーメルは、自ら心の救済を行うことで詩作を続けた。ただし、その行為は必ずしも他人の幸福に繋がったとは言いがたい。上の手紙を書いた同年、デーメルは妻パウラへの手紙で自分の過ちについて詫びている²⁹⁾。住み込みの女中ケーテとの間に性的関係があったことをうかがわせる内容である。

1892年1月1日には、親友のリリエンクローンへの手紙で「幸せな結婚生活なんか存在しない——そんなのは全部理想論にすぎない³⁰⁾」と書き、パウラとの結婚生活に軋みが生じていることを明かしている。デーメルは神経症を患い、翌年にはイタリア旅行に出かけてしまう。

1895年に知り合ったイーダ・アウエルバッハとの恋は、既婚者同士の恋愛で、5年以上に及ぶ三角関係はパウラを苦しめた。この恋愛から、『女と世界』が生まれることになる。

29) Dehmel (1922), S. 47-48.

30) Dehmel (1922), S. 77.

Poetry as Self-Redemption
—The Early Aesthetics of Richard Dehmel

Seigo NITTA

《Abstract》

The early aesthetics of Richard Dehmel are closely connected with naturalism in Germany at the end of the 19th century. Naturalism in Berlin shaped the term "modernity," which Eugen Wolff introduced through his lecture for the literary association "Durch!" in 1886. The goal of this literary movement is, above all, to bring about modern poetry in Germany through social, national, religious-philosophical and literary struggles. In contrast to Stefan George, Dehmel thought that art should exist for life, not for art's sake. Poetry was first and foremost the same as experience. Before and after the publication of the first poem "Redemption" (1891), Dehmel engaged in intensive reflections on Christian ethical issues such as "self-redemption" and "eternal life." He tried to reconcile the traditional ethics of Christianity with the modernity of poetry by integrating his newly interpreted principle of redeeming himself through his aesthetics.

